

熱闘 夏の甲子園



大会第7日

全国高校野球選手権大会
第7日は12日、甲子園球場で2回戦4試合が行われ、愛工大名電(愛知)が3回戦へ進んだ。

江(滋賀)明豊(大分)海星(長崎)が3回戦へ進んだ。
愛工大名電は八学光星(青森)に延長10回、6-5でサヨナラ勝ち。美濃が適時打で試合を決めた。愛工大名電が夏の甲子園で2勝を挙げるのは1981年にエース工藤公康を擁して4強入りして以来、41年ぶり。今春の選抜大会準優勝の近江は鶴岡東(山形)を8-3で下した。山田は2本塁打を含む11安打を許したが、12三振を奪って3失点完投。明豊は一関学院(岩手)に7-5で競り勝った。九回に牧野の適時打などで2点を勝ち越した。海星は天理(奈良)に4-2で勝利。序盤の得点を向井、宮原の継投で守り切った。

八学光星(青森)

001 010 300 0 | 5
100 000 400 1x | 6

愛工大名電(愛知)

(延長10回)

(光) 洗平比、宇田、渡部、富井、洗平歩、富井一文元

(愛) 有馬、岩瀬、山田一藤山

▷本塁打 佐藤1号①(有馬)

▷三塁打 深野、市橋、有馬▷二塁打 洗平比、深野▷犠打 大森、石村▷盗塁 市橋(2)▷失策 佐藤▷暴投 有馬、岩瀬

▷試合時間 2時間48分

2
回
戦

【評】八学光星は1点を追う三回、洗平比の二塁打と井坂の左前適時打で同点に追い付いた。五回には佐藤が左翼フェンス直撃のランニングソロ本塁打。七回には四球と井坂、深野、中澤の3連打で3点を奪い、4点をリード。なお1死二、三塁の好機だったが、積みかけられなかった。先発の左腕洗平比は5回1失点と好投。ただ、七回に2番手の宇田、3番手の渡部が打ち込まれて追い付かれた。打線も相手3番手を打ちあぐね、同点のまま延長に突入。再登板した富井が十回に三塁打を含む2安打を浴び、力尽きた。

【光星】	打	得	安	点	振	球	犠	盗	失	打	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
井坂	5	1	3	1	0	0	0	0	0	.444	三ゴロ
深野	5	1	2	2	1	0	0	0	0	.375	空三振
中野	5	0	0	0	0	0	0	0	0	.000
洗平比	4	0	0	1	0	0	0	0	0	.250
渡部	4	0	0	0	0	0	0	0	0	.000
富井	1	0	0	0	0	0	0	0	0	.000
井上	1	0	0	0	0	0	0	0	0	.000
藤原	1	0	1	2	1	0	0	0	1	.333
佐文	5	0	0	0	3	0	0	0	0	.111
洗平	2	1	1	0	0	0	0	0	0	.500
宇田	0	1	0	0	0	1	0	0	0	.000
成田	1	0	0	0	0	0	0	0	0	.500
計	42	5	12	5	6	2	0	0	1	.316

【愛名電】	打	得	安	点	振	球	犠	盗	失	打	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
藤原	4	1	3	1	0	1	0	0	0	.875
森田	3	0	0	0	0	2	0	1	0	.000
藤原	3	4	0	1	0	0	0	2	0	.286
田中	4	1	1	0	0	1	0	0	0	.500
馬場	5	2	3	0	0	1	0	0	0	.625
市橋	4	1	1	1	2	1	1	0	0	.250
美濃	4	1	1	2	2	1	1	0	0	.750
岩瀬	2	0	1	0	0	0	0	0	0	.167
村山	1	0	0	0	0	0	0	0	0	.000
藤原	3	0	1	0	0	1	0	0	0	.125
計	34	6	13	5	7	2	1	0	0	.406

投手	回	打	投	安	振	球	失	責	防	率
洗平比	5	18	7	4	4	3	1	0	0	0.00
宇田	1	5	18	1	0	1	2	2	18	0.00
渡部	2	7	26	4	1	1	2	2	4	7.6
洗平歩	2	9	27	2	0	1	0	0	0	0.00
富井	1	15	0	0	0	0	0	0	0	3.86
有馬	6	31	9	4	10	3	2	5	5	4.40
岩瀬	3	2	8	0	1	0	0	0	0	0.00
藤原	3	11	37	2	2	0	0	0	0	0.00

●数字=回数 白ヌキ=安打 2=二塁打 3=三塁打 本=本塁打

八学光星・洗平歩人主将「中盤は有利に進められたが、最後はサヨナラ(負け)。甲子園の怖さを思い知らされた」

光星総力戦 涙の惜敗

手中に取めかけた勝利が目前でこぼれ落ちた。一時は4点のリードを奪った八学光星が、相手の底力の前に終盤で逆転を許し、2時間48分の死闘の末にサヨナラ負け。ベンチ入り18人中15人を投入したが、及ばなかった。仲井崇基監督は「負けたのは私の力不足。(終盤の緊迫した場面で)もっと選手に声をかけていたら」と厳しい表情を浮かべた。

初回に先制される苦しい立ち上がりだったが、三回に井坂泰三の左前適時打で同点。五回は佐藤航太の左翼ランニング本塁打でリードを奪った。七回には深野友歩の右翼線三塁打や中澤恒貴の中前適時打など長短3連打を浴びせ、相手好投手の有馬加久を攻略し、4点差とリードを広げた。「打の光星」としての真価を発揮した。

だが、その裏から雷車が狂い始めた。2番手の宇田海希がピンチを招くと、甲子園初戦で力投した3番手の渡部和幹がプレッシャー



で球威を欠いたボールをこごとく相手打線にはじき返され、試合を振り出しに戻された。

八、九回こそ踏ん張ったが、打線は相手3番手のボールの見極めに窮し、追加点を挙げられなかった。逆に延長10回、再登板となった富井翼がいきなり無死三塁の大ピンチを招き、申告敬遠などで二、三塁とされ、サヨナラ打を浴びた。今夏の光星を支えてきた「継投」の難しさを露呈した。

打球の行方を確認した富井はマウンドに膝から崩れ落ち、しばらく立ち上がれなかった。真っ先に駆け寄った洗平歩人主将は「誰も富井を責められない。よく投げてくれた」とかばった。

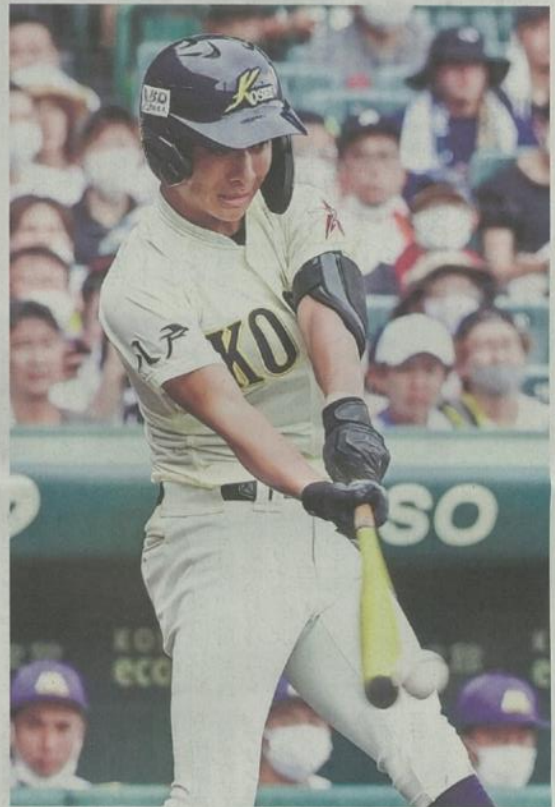
3年ぶりの聖地の夏は、2回戦で幕を閉じた。洗平主将は「みんなのおかげでここまでやってこられた。この悔しさを胸に、今後の人生に向かっていきたい」と仲間に向けて語り、後輩たちに深紅の大優勝旗への夢を託した。

(福田聡)

4点リードつかの間、勢い失う



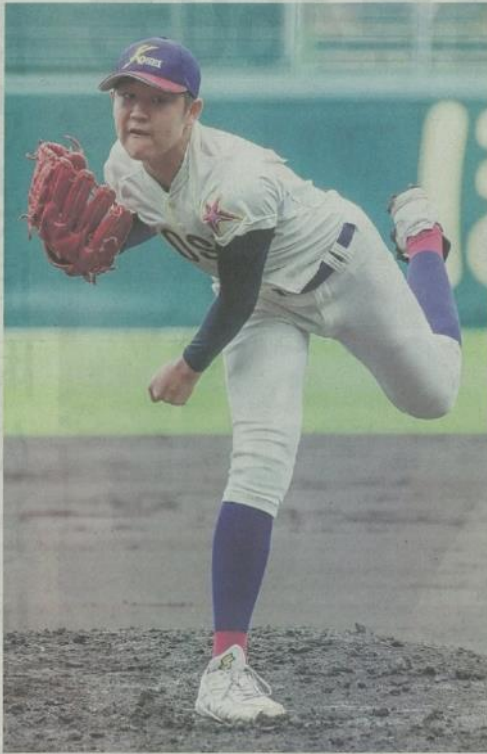
延長10回、八学光星は洗平歩人主将(左)がサヨナラ打を浴びた富井翼に駆け寄る＝甲子園



【八学光星一愛工大名電】7回八学光星1死一、三塁、深野友歩が右翼線に2点三塁打を放ち、4-1とする

洗平比先発、踏ん張った1年生

継投策駆使 かわせず



【八学光星 聖工大大会】1年生ながら先発マウンドに上がり、5回4安打1失点と力投した洗平比呂

甲子園

来春も聖地へ「経験生かす」

1年生左腕が聖地のマウンドで躍動した。八学光星の先発洗平比呂は5回4安打1失点。同校OBで元プロ野球中日の父・竜也さんをほうふつとさせる力強い投球で、試合の行方を左右する重要な仕事を全うした。今夏は青森大会準々決勝以来、2度目のスターター起用だった。「緊張はしたが、まずまずの結果。多くの観客がいる甲子園のマウンドは楽しかった」と胸を張った。

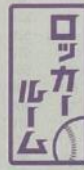
先発は試合3日前のミーティングで仲井崇監督から言い渡された。指揮官からのサプライズ起用に、「びっくりしたが、任せられたからにはチームを勝たせるだけだ」と闘志を奮い立たせた。

初回は制球が安定しなかった。先頭打者に初球をはじめ返され、計2安打と味方の守りのミスで1点を先うなど、早々と攻め立てられた。

それでも、スタメン6人が左打者の打線を相手に、四回までは毎回走者を背負いながらも、味方の堅守に支えられて踏ん張った。「低めを意識しながら、直球、スライダーを外角に集めた。味方打線が取り返してくれ

るだろうと思って、気持ちを切り替えることができた。五回は三者凡退に打ち取ったが、六回のマウンドにその姿はなかった。

結果的にチームは七回以降に計5失点。1年生左腕の頑張りには報われなかった。「体力的にはまだ投げられた。監督の判断だから仕方ないが、自分なら抑えられた」ときつぱり。強気な発言は、新チームを背負う覚悟の裏返しだ。「甲子園での経験を生かし、まずは秋の県大会、東北大会を勝ち抜け」。目指すは来春のセンバツのマウンドだ。



（上村公徳）

文元 2連続盗塁阻止 5投手支えた強肩捕手



【八学光星 聖工大大会】2回聖工大電死一塁、八学光星の文元磨生（左）が相手の二盗を強肩で阻止する

○：八学光星の文元磨生が脇の要としての役割を十二分に果たした。最終的には打ち込まれた格好となったが、ベンチ入り5投手をリードし、粘り強い守りを呼び込んだ。「甘く入った球は打たれてしまったが、各投手の調子のいい球を把握して、カウントを取ることができた」と淡々と語った。

1点ヒヤインドの二回には2連続で盗塁を阻止した。1死一塁、2死一塁の場面で、素早い動作と強肩ふりを発揮した。「一つでも盗塁を許せば、試合の展開が変わっていた。プレーに必死だったとうなずいた。細かい継投策を使うチームを青森大会から支え、守備に貢献してきた。「捕手はチームの勝敗を分けるポジション。甲子園の舞台で務めることができて良かった」と感慨深かった。



【八学光星—愛工大
名電】5回八学光星
無死、佐藤航太（右）
が左翼フェンス直撃
の当たりでランニン
グ本塁打を達成する

佐藤激走 ランニングHR

○：八学光星は1-1の同点で迎えた五回、先頭の佐藤航太が2球目を強振した。「甘い直球。安打か本塁打か分からなかったなので、とにかく全力疾走した」。高々と舞い上がった打球は左翼フェンスを直撃。その間に三塁も蹴って顔を突っ伏しながら本塁に滑り込んだ。甲子園でも珍しいランニング本塁打となった。

初戦は1番打者を務めたが、青森大会から調子が上がってきていなかったため、2回戦の2日前に仲井宗基監督から7番への「降格」を言い渡された。「出塁への意識が強くなってしまい、本来の打撃を見失っていた」

ただ、打順が下がったことで肩の荷が下りた。「状況に合わせたスイングをすればいい」。1打席目は二飛だったが、2打席目に自身高校通算15本目の本塁打、「公式戦初のランニング弾」をマーク。会場からは驚きの声援と拍手が湧き起こった。

結果的に勝利には結び付かなかったが、夢舞台で持ち味の打力と走力をアピールした。「芯で捉えた完璧な当たりだった」。ちよっぴり誇らしげだった。

【八学光星一愛工大名電】 7回八学光星1死二、三塁、
織笠陽多は空振り三振に倒れる



強打の象徴・織笠無安打

○…青森大会から打撃でチームをけん引してきた織笠陽多（六戸町出身）。この日は4打数無安打と不本意な結果に終わり、「打てずに（チームメイトに）申し訳ない」と悔しさをにじませた。

4点リードの七回1死二、三塁と絶好の場面で打席に入ったが、三振で好機を生かせず、「自分が打っていたら試合も優位に進められたが…」とうつむいた。

それでも、「小学生の頃から憧れていた舞台で最高のメンバーと野球をできたのはこれからの糧になる」。今後も野球は続けるといい、「甲子園での経験をこれからの人生に生かしたい」と前を向いた。

あと1年、成長誓う中澤

チーム強化、「日本一の遊撃手に」

○…昨秋、今春と青森県内で無冠だった八学光星で、今夏の甲子園出場の原動力となった一人が2年生の中澤恒貴。打線では中軸、守りでは遊撃手を務め、2回戦でも存在感を遺憾なく発揮したが、本人は「好機で打てなかった。投手陣が苦しい時に守備のミスをしてしまった」と反省ばかりが口を突いた。

地元では秋季地区大会が始まっており、新チームの初戦は20日の予定。「甲子園に出たチームはこれからも期待が大きいです。プレッシャーをはねのけて、当たり前のように県で優勝できるチームをつくる」ときっぱり。

個人としても「守備も打撃も隙のない、日本一の遊撃手になる」と闘志を燃やしていた。

【八学光星―愛工大名電】4回愛工大名電無死一塁、八学光星は相手の二ゴロで、井坂泰三（右）からボールを受けた中澤恒貴（中央）が一塁に送り、併殺を完成させる



熱い試合、後輩に拍手 光星OB

○…一塁側アルプススタンドには、関西出身者を中心とした八学光星OBも駆け付け、後輩の戦いぶりに熱視線を送った。2016年夏の甲子園2回戦で、今回と同じ愛知代表の東邦に9-10で逆転負けを喫したメンバーの姿もあった。

当時の先発だった和田悠弥さん(24)は勝利を祈って見守ったが、今回も4点リードからの逆転負けに「愛知代表に何とか勝ってほしかった」と残念そう。それでも「久しぶりにこれほど熱い試合を見た。この経験を今後に活かしてほしい」と後輩に拍手を送っていた。

一塁コーチャーだった辻優大さん(24)は「今年はチーム全体で戦っていた。甲子園出場は一生誇れる経験だ」とナインをねぎらった。

